2023年11月17日（日）主日朝礼拝説教

『責任を果たす者』井上隆晶牧師
ルツ記2章17～20節、4章13～17節　マルコ福音書5章35～42節

❶【神は闇の中でも働いておられる】

今日は、私の33年の牧会生活の中で初めてルツ記をお話しします。有名なお話ですが、とても意味深い物語です。
エリメレクとその妻ナオミは国が飢饉になったので、二人の息子を連れて外国のモアブに避難しました。そこで二人の息子は妻を娶るのですが、この外国の地で、夫と二人の息子は亡くなってしまい、女たちだけになってしまいました。そこでナオミは二人の嫁に、まだあなたたちは若いのだから自分たちの民の所に帰って再婚するように勧めますが、二人の嫁の内のルツだけは、お母さんにどこまでもついて行きますといいます。そこでナオミはルツと二人で故郷のベツレヘムに戻ってきました。帰ると、ナオミは町の人たちにこう言います。「**どうかナオミ（快い）などと呼ばないで、マラ（苦い）と呼んでください。全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです。出て行く時は、満たされていた私を、主はうつろにして帰らせたのです。**」（ルツ1：20～21）
私たちは不幸や災いに会うと、神から見捨てられたと思ってしまいます。ある人が「神が愛なら、なぜバビロンでイスラエルの民に70年間も奴隷生活をさせたのか。1年で帰らせても良かったのではないか。」といいました。しかし神が与える苦難の70年には意味があるのです。このバビロンでの生活の中で、自分たちの民族性を失わないために、彼らは旧約聖書を造りました。創世記も、詩編も、バビロン捕囚の中～後で書かれたものです。もし70年間の苦難がなければ、聖書は生まれなかったでしょう。エジプトでの奴隷生活も同じです。ヨセフが大臣の時、ヘブライ人たちはとても良い環境に置かれました。誰もパレスチナに帰ろうとは思わなかったと思います。ヨセフが死に、新しい王が出て、ヘブライ人は奴隷となりました。彼らがエジプトを出たいと思うためにも苦難が必要だったのです。私たちがこの世から、神の国を憧れるようになるのも同じです。この世が快適だったら、誰が神の国を憧れるでしょう。この世に深く根を張る者は、神を求めようとはしません。そこで神はその根を一つ一つ抜かれるのです。神には計画があるのです。

❷【落穂ひろい】

帰って来ても食べる物がありません。そこで嫁のルツはナオミに「落ち穂を拾いに行ってきます」といい出かけます。彼女はたまたまエリメレクの一族のボアズの畑に行き、そこで落ち穂を拾いました。ミレーの有名な絵画「落ち穂拾い」は、この場面を描いたものです。ボアズは彼女に厚意を示し、よその畑に行かないでここで拾うように、更に僕たちには刈り取った良い実のついた束からわざと穂を抜いて落

とすように命じます。夕方ルツが落ち穂の束を背負って家に帰ると、しゅうとめのナオミは「**目をみはった。**」（2：18）といいます。ナオミの驚きようが伝わってきます。こんなことはあり得ないからです。ルツがことの次第を話すとナオミはこう言いました。「**どうか、生きている人にも、死んだ人にも慈しみを惜しまれない主が、その人を祝福してくださるように。その人は、私たちと縁続きの人です。私たちの家を絶やさないようにする責任のある人の一人です。**」（2：20）ルツをボアズの畑に導いたのは神です。神は人を導き出会わせます。出会いには神の計画があるのです。ナオミはこのとき、初めて神が今も働いておられるのを知ったのです。彼女の心に再び信仰の光がともり始めました。ナオミは「**死んだ人にも慈しみを惜しまれない主**」といいました。「**お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。**」（マルコ 5：35）と言った使いの言葉のように、死んだらもう終わりだ、死の世界まで神の手は及ばないと私たちは思ってしまいます。しかしそうでしょうか。キリストが復活したという事は、神の力は死の世界でも働いたということなのです。神は今も死んだような者を動かし、生かす力があることを信じ、祈りましょう。

❸【責任を果たす者】

この物語には繰り返し出てくる言葉があります。それは「**責任のある人**」、「**責任を果たす**」、「**責任を負う**」という言葉です。15 回も出てきます。イスラエルには夫が亡くなった時、その家が絶えることのないように、親族がその土地を買い取り、未亡人を妻として引き取り、子孫を残さなければならないという決まりがありました。それを「イブム婚」といいます。当時の福祉制度です。この制度故に、中近東では一夫多妻が多いのです。でも財産がない者が他人の家を再興することは出来ません。自分の家が倒れてしまうからです。最初の責任のある人がいたのですが、彼は「**そこまで責任を負うことは私にはできかねます**」(4:6) と言ってそれを辞退したので、二番目の権利のあるボアズがルツを娶りました。このルツがオベドを産み、オベドがエッサイを、エッサイがダビデを産み、このダビデの子孫がヨセフであり、キリストへと流れてゆくのです。こうしてボアズとルツはキリストの系図に載せられる先祖となりました。ここではボアズはキリストのひな形として書かれています。

●ある奇跡のようなニュースのお話を聞きました。キリエとブリエーレという名前の双子の赤ちゃんが産まれたのですが、二人とも未熟児でした。この写真の右の子がキリエという名の女の子で、左がブリエーレという名の女の子です。これは 3 か月ぐらいの写真です。この左のブリエーレは、呼吸が不規則で心臓の病をかかえていて体重もなかなか増えない病弱児でした。それで、医師や看護師はさまざまな治療を施すのですが、なかなか良くなりません。ある時、一人の看護師が二人を一緒に寝かせてはどうかと提案して、そのようにしてみたのです。そうすると、自然に元気な方のキリエがそっとブリエーレの肩に手を回すようになったのです。まるで

ブリエーレを抱きかかえるようにです。そうすると、何とブリエーレの病状が回復し始めたのです。ブリエーレの呼吸が安定しだして、体重もすこしずつ増えていきました。そして数か月後には二人とも退院して、その後も健康に暮らしているそうです。

私はこの話を聞いて、旧約聖書の中に出てくる死んだ子供を生き返らせた奇跡の話を思い出しました。シュネムの婦人の子供が死んでしまった時、エリシャは死んで横たわっている子供の上に屈み込み、自分の口をその子の口に、目をその子の目に、手をその子の手に重ねると、子どもの体は温かくなり、起き上がった、と書かれています。（列王記下 4：34）また、サレプタのやもめの息子が病気にかかり息を引き取った時、エリヤは神に祈り、子供の上に三度身を重ねて祈ると、子供は生き返りました。（列王記上 17：21）この独特な癒し方には意味があるのです。彼らが死人をよみがえられた奇跡は、主イエス様が私たちになされたことのひな形として書かれているのです。すなわち、主イエス様が私たちと、ご自身の体を重ね合わせて一体にすることによって私たちを生かしたのです。

私たちはよく問題のある人と関わる時に「そこまで責任を負うことはできません」と言って、その人と関わらなくなることがあります。自分が傷つき、貧しくなるのが嫌だからです。「先生、私を見捨てるんですか！」と今まで、何人もの人から言われました。

●先日、松原宏樹先生の講演を聞きました。年間、中絶で殺される子供は 60 万人いるといいます。癌で亡くなる人は年間 38 万人です。難病や重度の障害をもって生まれた子どもは親が引き取らず施設に入れられる子が多いのです。ある病院の奥に誰も会いに来てくれない重度の障害を持って生まれた女の子の赤ちゃんが置き去りにされていました。先生は「何も出来ないけど、お父さんにはなれる」と言って 2 人の難病を抱えた子を引き取り、自分の子にされました。「生まれて来る命で駄目な命などない」と先生は言います。『小さな命の帰る家』という、障害を持った赤ちゃんを家に帰す運動をされています。本当に愛を実践されている、偉いなあと思いました。

キリストは私たちを見捨てることなく、「私が引き取ります。私がその人の責任を負います。」と言ってくださったのです。私たちの罪の責任を負って十字架に登り、三日目に復活して人類を再興してくださったのです。誰も足を止めてくれなかった私に目を留め、御自分の子、神の子にしてくださいました。それを覚えて感謝したいと思います。